

壁を乗り越えて

益田市立中西中学校 三年 中尾早希

車いすの方や義足を着けている方と、ときどき出会うことがあります。そんなとき、以前の私は、ただ「かわいそう」と思うだけでした。「生活するのが大変そうだな」と。そう感じるのは、自分には関係ないから。どこか他人事だったからです。しかし、そんな考え方ががらりと変わるできごとがあったのです。

私のいとこの話です。彼は小学二年生の時、体操の練習中に右足をひねってしまいました。痛みがなかなか治まらなかったため病院に行き、精密検査を受けたところ、「骨肉腫」という骨の癌だということが分かりました。その後すぐに入院が決まり、抗がん剤治療を受けました。最終的には足を切断するしかなくなり、手術と、半年以上にわたる治療をしました。幼かった私も闘病中の彼をお見舞いに行きましたが、その姿は想像したよりもはるかに弱っていて、痛々しく、かわいそうに思えてなりませんでした。

そんな時に、いとは主治医の紹介で、一人のプロの車いすテニスプレイヤーの方と出会ったのです。その方は島根県出身で、いとこと同じく学生時代に右足の骨肉腫を発症された方でした。最初はその方の車いすテニスの本を読むだけでしたが、その後、実際にその方と何回か会うことができ、会話をしたり一緒に練習をしたりするようになったそうです。その方との出会いをきっかけに、いとはテニスの楽しさとも出会い、次第に明るい表情を取り戻すことができたのです。

その方はいとこに会うたびに、

「たくさん練習して、いつかラリーをしよう」

と、何度も励ましてくださったそうです。そしていとは、その約束を果たすために一生懸命テニスの練習に励み、同時に治療も頑張ることができました。

それから数年たち、私はいとこと久しぶりに会う機会がありました。義足を着けているとは思えないほど元気よく、自由に走り回っている彼の姿を見て、私は驚きました。そして、義足や車いすを使っている人を「かわいそう」と思っていた自分の考え方は、「なんだか違うな」と思うようになりました。

義足や車いすを利用しないと歩くことができない人はいます。しかし、自分を「かわいそう」とは思っていないのではないのでしょうか。そして「かわいそう」と周りの人に思われることも、望んでいないのではないかと感じるのです。だれかを「かわいそう」という気持ちで見ってしまうと、自分と相手との間を、何か壁のようなもので隔ててしまうような気がします。「世界で闘える車いすテニスプレイヤーになりたい」という夢を見つけた彼を、私は「強いな」と思います。

いとこの姿を見て、私は二つのことを考えました。一つ目は、体に何かハンディーキャップがあるからといって、「かわいそう」と思うことは間違っているということです。そういう決めつけをしないで普通に接し、かかわっていきたいです。

二つ目は、困っている人がいたら助けてあげられるようになりたいということです。一人ではできないようなことでも、少しのアドバイスや手助けがあれば、できるようになることがあるかもしれません。彼の車いすテニスも、一緒にプレーする仲間や周りの人の協力によって、のびのびと楽しむことができるのだと思います。私も困りごとがあったとき、助けてもらったらうれしくなります。だから私は「かわいそうだから」という気持ちからではなく、どんな場面でも、何か困っている人がいたら自然に助けられる人になりたいと思います。

心に壁をつくることなく、「私にできることがあるかな」と考えて、一步を踏み出せる自分になっていきたいです。